

松本清張記念館

◆館報◆

2012.12
第41号

軍部は、絶えず「二・二六」の再発をちらちらさせて政・財・言論界を脅迫した。

『昭和史発掘』(全13巻)
1965(昭和40)年初版
文藝春秋



『昭和史発掘』(全9冊) 新装版
2005(平成18)年3月初版
文藝春秋

現在入手できる本
『昭和史発掘』全9冊 新装版 文春文庫



「昭和史発掘」は昭和三十九年七月から四十六年四月まで、「週刊文春」に連載された。

目次

- 清張没後20年・開館14周年記念講演会……………2
- 清張没後20年記念特別企画展「昭和史発掘への招待」……………5
- 展示品紹介……………6
- 点描 作品の舞台を訪ねて……………6
- 友の会活動報告……………7
- トピックス……………8

作品紹介

「昭和史発掘」は清張の代表的なノンフィクション作品である。大正末年から昭和十一年に起きた事件を捉えなおし、日本近現代史の闇に光を当てた。

昭和四年「満洲某重大事件」が起こる。総理大臣・田中義一は真相究明を求めるが、軍内部の反対で阻まれる。陸軍出身で大將・大臣まで務めた田中ですから、陸軍をコントロールすることができなくなっていたのだ。

農村は疲弊し、社会不安は増していた。政財界への不満を募らせた青年将校の間に、武力クーデターによる国家改造を求める動きが高まる。彼らの計画を利用しようとする中堅将校もあらわれる。秘密結社「桜会」によるクーデター計画、右翼による血盟団事件、海軍将校を中心とした五・一五事件。思想・言論への弾圧が強化されていく社会の動きにも筆を向けながら、清張は丹念に、昭和初期の日本の姿を多角的に追う。

軍部は政治への影響力を強め、陸軍内では反目し合う統制派と皇道派の軋轢が深まっていった。そして陸軍士官学校事件、続く相沢事件が引き金となり、ついに昭和十一年二月二十六日未明、皇道派青年将校は一四〇〇余名の兵を率いて蹶起するのである。

「昭和史発掘」の圧巻は後半を占める二・二六事件である。膨大な新資料と証言をもとに、秘められていた特設軍法会議をはじめとして事件の全貌を克明に描き出す。

考察は緻密かつ徹底でありながらも平易な文章で連載中から読者の支持を集め、「作家と史家の融合」と激賞された大作。連載から約半世紀近く経ついまも愛読され続けている。

(専門学芸員 小野芳美)

「砂の器」と俳句

講師 長谷川 權

- 平成二十四年八月四日(土)
- 北九州市立男女共同参画センタームーブ二階ホール
- 参加者 三五〇名

「砂の器」への思い

今日は「砂の器」と俳句という題でお話します。実は「砂の器」と「俳句」が何か関わりがあるという確信があった訳ではなく、「砂の器」が清張の作品の中でいちばん好きだということ、僕が俳句をやっているの、この二つを足せば何とかなるだろう(笑)ぐらいのことだったんです。しかし読み直して、実際に深い関わりがあることがわかりました。

なぜ「砂の器」が、僕のいちばん好きな作品かというお話をします。僕は大学へ進学する時、医学部に行こうか法学部に行こうかと真剣に悩みました。医学部というのには、確固とした理由がありました。ハンセン病救済に一生を捧げた、熊本・八代の宮崎松記先生の仕事に、僕は中学のころからとても感銘を受けていました。それで「砂の器」は、僕の心の中に強く引つ掛かっている作品なんです。

「砂の器」には俳句が数箇所出てきますが、単に飾り物ではなく、作品自体のモチーフ、あるいは松本清張という作家自体に非常に深く関わっているのではないかと

思いました。言い換えると、清張が俳句に関心がなければ、「砂の器」という名作は書かれなかったのではないかと思います。

作中で詠まれる俳句

さっそくですが、どういう俳句がこの小説の中に出てくるか、見てみたいと思います。

千しうどん 若葉に流して光りけり

北の旅 海藍色に夏浅し

寝たあとに草のむらがる 衣川

今西栄太郎

算盤の掌にひえびえと 秋の村

桐原小十郎

秋田県の羽後亀田に、今西と、彼を尊敬している吉村という若い刑事が行きます。前の三つはそこで出てくる俳句です。

一句目は、羽後亀田は千しうどんの産地で、捜査でまわると干している場面につかる、そこを詠んでいる。事件が六月頃ですからちよつと後で、東北の若葉の時期にあたる。

二句目は、作中に「日本海の色は深い」というセリフが出てきますが、その日本海を詠んでいる句です。(海藍色に)というところが日本海らしいですね。「夏が浅い」、季節を表わしています。

三句目は、羽後亀田で不思議な男がうろろして、土手の草原で寝ていた、というのを詠んだ句です。衣川という俳句をやっている人は「奥の細道」の平泉の場面で衣川という川が出てきますからそつちかと思うんですが、秋田にこういう川があるんでしょうね。この句には実

は季語がありません。桐原小十郎という出雲の山奥の亀嵩(かまかみ)の人が、名産品の算盤を送ってくる。その送りに添えられた句が最後の一句です。

こうして四句並べてみると、ある共通点が浮かび上がってくる。まずひとつは、色彩感覚が鮮やかであるということ、その背後にあるのは、光です。一句目には(千しうどん)がまさに(光)っている。

二句目は(海)が(藍色)、夏の日本海の冷やかな、やわらかな光を感じる、三句目も草の緑が鮮やかに見えてきますね、夏の日差しが降り注いでいる。四句目の桐原老人の句も、(掌にひえびえと秋の村)と、新しい算盤の艶やかな秋の光を感じさせる句です。これは四つとも色や光への関心を核として詠まれた句であるということになりました。

松本清張は、色とか、色を蘇らせる光というものの対して、とても敏感な作家だったということがこの四句から推測できます。作家のひとつの性向が、俳句となって表れているのではないかと思います。

光と闇

刑事という職業は、闇に閉ざされた世界に光を当てて明るみに出していくという仕事です。蒲田の操車場で夜の闇に紛れて殺人が行われ、明け方に発見され事件が始まります。事件を解き明かすということは、闇に閉ざされた物事に光を当てる作業です。次に、推理小説というものが、やはり闇に光を当てるといふ文芸の形式といえます。それともうひとつは、清張の描写の方法が、まさに光の描写であるということ。

そうすると、今西という刑事も、清張も、光とても繋がり深い人物です。光

があるところには、必ずそこに闇があります。闇と光のどちら側に立つかで、その人の生き方が変わってきます。

以上のことを考えると、なぜ松本清張が小説家になり、しかも推理小説を沢山書いたか、ということがよくわかる。彼はもともと、光を求めるというか、彼自身が光というか、そういう体質の人ではなかったかと思えます。清張が手がけた分野は推理小説だけではなく、古代史、現代史の分野にも及んでおり、例えば古代史なら謎につつまれた古代の歴史に光を当てて、そこから何かを明るみに出していく作業であるし、現代史の「日本の黒い霧」でも、暗闇に閉ざされた現代の暗部に對し、清張なりの光を差し込ませて明らかにしていくという作業です。つまり、闇を光が照らす、というのが、清張文学が持っているひとつの原型ではないかというふうにも思いました。このように、清張とは、光と深い関係にある人であったということ、を、まず申し上げておきたい。

「砂の器」にある光の描写をいくつかご紹介いたします。まず冒頭部分、トリスパーがでてくる一行目です。

国電蒲田駅の近くの横丁だった。間口の狭いトリスパーが一軒、窓に灯を映していた。

これがまさに松本清張の基本の描写です。検車係は若い男だったが、最後の七両目の車輪に懐中電灯の光を当てて、棒立ちになった。(略)

七両目に来て、検車係は遠くの方から懐中電灯を車の下にさし向けた。その光の中に、たしかに、真赤になった人間らしいものが、車輪のすぐ前のレールに横たわっていた。

次は今西が自宅に帰ってきたところを奥さんが迎えてくれた場面です。



氏

格子戸が開いて、妻の芳子が顔を出したが、灯で肩だけが明るかった。

実に印象的な場面ですね。次に、刑事たちが夜行列車に乗る場面です。

東北の方は初めてという二人は、十一時ごろまでは眠れなかった。暗い窓に疎らな人家の灯が流れて行く。夜で景色は何もわからなかったが、それでも、その闇の中から東北の匂いがしてくるような気がした。

実際はもつとあります。清張がいかに闇を照らす光というものに反応していたかがわかります。作家の光への関心が俳句に表れている、そういう意味では、清張と俳句は実に関わりが深いということになります。和賀は利己的に政治家の娘と結婚する俗物として描かれている、関川も、俗情に流されいくらでも筆を変えようとする男なのに、和賀のことを「政略結婚するような奴は許せない」と陰では言う。和賀は、婚約が決まると恋人を捨て、関川は妊娠した銀座の女給（今で言うホステスさん）を殺害します。表は華やかなんだけど、一皮捲ると真つ黒です。

対立の構図

この作品の中に俳句に関わる人が何人か出てきますが、先ほどの今西刑事、桐原小十郎という老人、殺された三木という人も亀嵩で桐原と付き合い俳句を詠むようになったとあります。そここのところを紹介します。桐原老人のセリフ。

「いや、この土地は、がんらい、俳句の盛んなとこでしてね。毎年、松江や米子、それに浜田あたりからも、わざわざ俳人がここに集まるくらいでして。というのは、昔、子琴という芭蕉の系統を引く俳諧師が、この出雲にくだらつしやって、私の先祖の代にこの邸に長くおらつしやつたことがござりました。そげな因縁で、松江藩の文化的な藩風もあつて、この亀嵩は俳句でも知られてきたのでし」

（私がかねて駄句をひねるもんでしから、三木さんもそれにくわんけいして俳句を作っておられました）というふうには、桐原老人が語る場所があります。少なくとも作品の登場人物のうち今西、桐原、殺された三木、それと吉村という若い刑事も、今西に俳句を見せてくれとしようとして悪い気持は持っていない。この四人（厳密にいうと三人）は、古めかしいけれども地道な人たちのグループです。

これに対して、もうひとつのグループは、ヌーボー・グループです。評論家や音楽家、演劇関係、建築家で、時代の最先端を行くような人々です。時代設定が昭和三十年前半ば、戦後十数年しか経っていない時代に、当時圧倒的な影響力を持っていたアメリカの文化を振りかざして威張っている、そういう人々です。表面上は華やかだけど、実際やっていることはどうか。和賀は利己的に政治家の娘と結婚する俗物として描かれている、関川も、俗情に流されいくらでも筆を変えようとする男なのに、和賀のことを「政略結婚するような奴は許せない」と陰では言う。和賀は、婚約が決まると恋人を捨て、関川は妊娠した銀座の女給（今で言うホステスさん）を殺害します。表は華やかなんだけど、一皮捲ると真つ黒です。

これをまとめると、俳句を詠むグループは「光」の側です。つまり物事に光を当てていく「善」の側の人たちです。それに対してヌーボー・グループの側の人たちは「闇」です。表はキラキラしているけれども実は暗闇が輝いているような人たちです。こういう人々を対比しながら、清張はこの「砂の器」を描き綴っています。作家自身が俳句を作る人だから、新時代的な、上っ面だけの華やかさに対して、とても批判的なのだと思います。僕もずっと俳句をやっているわけですから、私も「砂の器」のこの構図をみると実に頼もしい気持ちになります。

関川の書いた文章がいくつ引用されています。清張の創作か、あるいは当時の生意気な文章をちよつと真似て書いた文章ではないかと思えます。ひとりで言う「難解」です。「難解」とは、これが解らない連中は馬鹿なんだという裏側の気持ちがある。今でもいいますね。自分たちだけが偉い、芸術的に優れている、そういう夜郎自大的な考えを持っている人物として描かれている。二、三行ご紹介します。関川が和賀の音楽を批評している文章です。

この新しい前衛的な手法が、単に演奏家を要求する理由がなくなつてしまったという副次的な問題を、皮肉にも作曲家自体の観念不在に置き替えようである。少なくともその危険はある。何を言っているか解らない文章です。作中でも今西刑事が、何を言っているかチンプンカンプンと言う。今もこういう文章を書く人は信用できない。文章は、おおよそ四つに分けられます。一つは、やさしいことをやさしく書く。これはいたる所に溢れている、一種軽薄な文章ですね。二つめは、難しいことを難しく書く。世の中には確かにひとりで言では言い表わせなことを難しく書く人たちがおり、ある程度致し方ないかという部類です。三つめ、本当はやさしいことなのに難しく書くという人たちがいます。関川と

作品全体に通底する「俳句」

俳句を作るグループと、ヌーボー・グループの対比は、殺害方法にも影響しています。この小説の中では三人が殺されます。元巡査の三木、関川の愛人、劇団の若い俳優が殺される。すべて和賀が殺していますが、三木と、後の二人は、殺され方が全く違うんですね。

善良な三木を、和賀が過去を隠すために殺害する方法は、まず首を絞めて、石で顔を叩いて身元をわからないようにした。つまり野蛮な、極めて原始的な肉体的な、物理的な殺し方をするわけです。これが第一の殺人。

それに対し第二、第三の殺人、つまり恵美子という女性と若い俳優の殺し方は、超音波で精神を攪乱して死に追いやる。この殺し方の間にかんりのギャップがありますね。

これには理由があると思うんです。ヌーボー・グループの寵児である和賀が、自分と違うグループの善良な人を殺すときに、超音波というやり方が通用しない、その時はひとりの野蛮な人間になつて殺さざるを得なかった。これに対してあとの二人は、いわばヌーボー・グループの周辺にいる人々です。この人々には自分の方法が通用する。

殺害方法にまで、俳句を詠むか詠まないかが関わっている。俳句とは「砂の器」に作品として登場するだけではなく、人物の性格描写にも関わってくるし、サスペンスにとって重要な殺害方法にまで、おそろしく知らず知らずのうちに影響を与えてしまったのではないかと思います。



今西は刑事なんだけど俳句を詠む。「なんだけど」といいますが、警察関係の方で俳句を詠む方は沢山いますし、警視庁や県警にも俳句会などがあると思います。日本では珍しくありませんが、外国にいくところはとて珍らしいことです。

外国で「詩」とい

うのは選ばれた人しか詠みませんので、だれでも俳句を詠むということに、とてもびつくりするんですね。今西という刑事は俳句(詩)を詠む刑事ということでも珍しい。外国ではこういうキャラクターはいないと思います。ポワロにしてもシャーロックホームズにしても、おそらく詩は詠まない。日本でも俳句を詠む刑事とは珍しいと思います。だけど日本人から見ると、ごく当たり前の刑事さんです。

映画で完成した空間と時間の移動

以上、原作についてお話ししました。これをもとに映画が作られ、ドラマが作られていますので、原作との違いについて、ハensen病のことを中心にお話します。

一九七四年に松竹の映画ができました。僕は映画を先に観て、とてもよかったので清張の作品を読むようになった、というのが実のところ。今西を丹波哲郎が、吉村を森田健作が、和賀を加藤剛が演じています。三木を緒形拳。渥美清も映画館の人で出てきます。名優が沢山出てくる映画ですが、僕がこの中でいちば

ん印象深いのは、本浦千代吉を演じている加藤剛です。最初は加藤剛が主人公なんだと思っただけです。ほとんどセリフはないんですが、もの凄い迫力で、哀れ深いというか、ハensen病にかかった人の気持とか境遇というのを、姿とか表情で、すべて表わしていました。

映画は原作をいくつか変えています。まずヌーボー・グループはほとんど描かれない。和賀英良は前衛音楽家ではなく、新進気鋭の作曲家で指揮者でもある。時代が昭和四十年代になり、変更しなくてはいけないことが出てきます。

そのいちばん大きな問題がハensen病なんです。ハensen病をどのように扱おうかという問題は、原作から十年間動かすと相当変わります。ハensen病を隠すために事件を起したとなると、とても問題になる。特効薬が日本にも入ってきて、ほとんど感染力のない病気になったんです。そういう状況の中で、危険な病気という描写をするのは映画としてアウトです。ですから、三木が和賀を訪ねてくる動機が、ハensen病が治って父が今も生きている、その父親に是非会わせたい、というものになっています。「ハensen病が治る」という社会情勢を更に上手く使った設定です。

この映画のすばらしい部分は、後半にあります。親子が村を追われて各地をさまよう場面が、四季折々の景色の中で描かれる。警視庁で、丹波哲郎演じる刑事が淡々と事件の謎解きをしている一方で、この場面が描かれます。これによってこの映画はとても印象深いものになっています。

僕は、「砂の器」は原作だけでは完成してなくて、映画のこの部分を得て、初めて完成したと思います。清張さんはこの演出に、大喜びではなかったかと思いま

す。原作では鉄道が沢山使われ、出雲から伊勢から金沢の奥、秋田まで、本州の大半を移動することになる。空間的な移動は出てくるが、季節を時間的に移動するというのは書かれてないんですね。小説に入れると、謎解きがぼけてしまいます。映画の場合は単に謎解きだけでは場面もたない、これが大成で、「砂の器」を決定的に決めました。

なぜ、季節の描写を入れると支持を得られるかというと、日本の文学において古来、空間の移動と季節(時間)の移動は重要な要素で、たいていの古典の名作はこの二つをしっかりとふまえている。例えば「源氏物語」なども宮中の中だけでなく、ここ九州や当時の名所が登場すると同時に、四季折々の風物が描かれます。「伊勢物語」もそうです。場所を移動しながら季節が変わっていく。

もっとも典型的なのが芭蕉の「奥の細道」です。江戸から東北まで行くわけですが、季節は春から秋の「蛤のふたみにわかれいく秋ぞ」というところまで移ります。

この空間を動きながら季節が変わっていくということに、日本人は昔から弱いんです。小説では、季節の移り変わりがあまりなかったけれども、松竹の映画の後半部分に大々的に取り入れられている。というわけでこの映画の後半部分を待つ「砂の器」は完成した。おそらく、映画をご覧になった皆さんは、小説を読む時も、この場面を頭に思い描きながら読んでおられるのではないかと思います。

現代の「砂の器」

次に昨年放送されたテレビ朝日のドラマ「砂の器」、これは、戦争の傷痕をクロ

ズアップさせるといって特色以外は、時代設定もヌーボー・グループの描かれ方も、かなり原作に忠実です。しかし、ハensen病に関しては、完全に消えてしまいました。仕方ないことかもしれませんが、作品の出来栄に大きな影を落としています。ではどうしたかという点、本浦千代吉が、庄屋の家族を惨殺した殺人の疑いをかけられ、村にいられなくなるといって設定。これがとても弱いんですね、動機として。殺人事件の濡れ衣ということであれば、自分はやっていないと言えれば済むことです。子どもを連れて各地を放浪する理由にならない。

さらに大きな問題は、被害者である三木巡査が、原作あるいは映画では、ハensen病であるにもかかわらず(放浪時はうつろと考えられていた病気ですから親身に世話をす、その子どもを引き取って育てようとする、そういうことで三木巡査の人柄が浮かび上がってくるのに、ただ殺人犯と疑われた人を世話し、その子どもを引き取るのでは、三木巡査の善良ぶりが、十分に表わせません。

ハensen病というのは確かに「宿命」的なものを持っていて、大昔から不治の病、死病の代表的な病です。そういう人の力でどうしようもない「宿命」的な病気であったからこそ、三木の善良ぶりが浮かび上がった。この人が善良でないと「砂の器」は成り立たないわけですから、作品を裏で支えていたひとつの要素といえるでしょう。

何度も映画やドラマになるといっては、原作の力であり、更に作り変えられていく。この大いなる名作を書かれた松本清張という人、つまり原石を作り上げた人の力を、思わざるを得ません。ご静聴ありがとうございました。

昭和史発掘

への招待

開催期間 平成25年1月19日(土)~3月31日(日)
 場所 松本清張記念館地階 企画展示室
 入場料 一般 500円 中高生 300円
 小学生 200円 ※常設展示観覧料を含む

「昭和史発掘」は昭和39年から約8年にわたって連載された清張の代表的なノンフィクション作品です。大正末期から昭和11年までに起きた事件を捉えなおし、今日にいたる現代史の道筋を示しました。連載から約半世紀を経てなお色褪せず、いまでも多くの読者を魅了しています。

今回の企画展「昭和史発掘への招待」は、既に読まれた方には新たな作品世界へのご案内となり、また、未読の読者には、広大な作品世界を読みすすめる道標となるよう、当時の日本の姿や清張の言葉を通して、「昭和史発掘」の周辺をご紹介します。

【展示構成】

I 「昭和史発掘」の世界

「昭和史発掘」の全体像をご紹介します。長編の多い清張作品中でも、八年近くにおよぶ連載は群を抜いての長期連載です。この「昭和史発掘」を中心とした業績により、菊池寛賞・吉川英治文学賞を授与されています。いずれも連載終了前の受賞で、連載中からの世評と評価の高さが伺えます。

II 「昭和史発掘」へのいざない

「昭和史発掘」は、大正末期から昭和十一年の二・二六事件に至るまでの日本の姿を描き出しました。直筆原稿のほか、初公開の創作ノートや貴重な資料をご紹介します。

III 復元昭和史発掘

『週刊文春』連載当時の紙面を復刻します。風間完画伯の挿画が彩りを添える「昭和史発掘」を手にとってご覧ください。



写真提供 文藝春秋

- 関東大震災 (大正12.9)
- 田中義一、政友会総裁に就任 ① (大正14.4)
- 朴烈と金子文子取調中に「怪写真」撮影 ③ (大正14.5)
- 石田基検事怪死事件 ② (大正15.10)
- 「昭和」に改元 (1926.12)
- 田中義一内閣成立 (昭和2.4)
- 金融恐慌 (昭和2.3)
- 芥川龍之介 自殺 ④ (昭和2.7)
- 北原泰作二等卒が天皇に直訴 ⑤ (昭和2.11)
- 三・一五 共産党検挙 ⑥ (昭和3.3)
- 天理研究会検挙 ⑩ (昭和3.4)
- 張作霖爆殺事件 ⑦ (昭和3.6)
- 四・一六 共産党検挙 (昭和4.4)
- 田中義一内閣総辞職 ⑦ (昭和4.7)
- ニューヨーク株式市場大暴落、世界恐慌へ (1929.10)
- 佐分利貞男公使死亡事件 ⑧ (昭和4.11)
- 谷崎潤一郎と佐藤春夫の「声明」新聞各紙に掲載 ⑨ (昭和5.8)
- 三月事件 ⑪ (昭和6.3)
- 十月事件 ⑪ (昭和6.10)
- 血盟団事件 (昭和7.2)
- 五・一五事件 ⑫ (昭和7.5)
- 満州国建国宣言 (昭和7.3)
- 川崎第百銀行大森支店襲撃事件 ⑬ (昭和7.10)
- 日本、国際連盟を脱退 (昭和8.3)
- 小林多喜二 拷問により死亡 ⑭ (昭和8.2)
- 滝川幸辰、辞表提出 ⑮ (昭和8.7)
- 陸軍士官学校事件 ⑰ (昭和9.11)
- 美濃部達吉、貴族院で弁明演説 ⑯ (昭和10.2)
- 岡田啓介首相、国体明徴声明 (昭和10.8)
- 岡田啓介首相、国体明徴声明 (昭和10.8)
- 二・二六事件 ⑱ (昭和11.2)
- 盧溝橋事件 日中戦争はじまる (昭和12.7)



挿画・風間完

「昭和史発掘」各章タイトル一覧

- ① 陸軍機密費問題
- ② 石田検事の怪死
- ③ 朴烈大逆事件
- ④ 芥川龍之介の死
- ⑤ 北原二等卒の直訴
- ⑥ 三・一五共産党検挙
- ⑦ 「満洲某重大事件」
- ⑧ 佐分利公使の怪死
- ⑨ 潤一郎と春夫
- ⑩ 天理研究会事件
- ⑪ 「桜会」の野望
- ⑫ 五・一五事件
- ⑬ スパイ「M」の謀略
- ⑭ 小林多喜二の死
- ⑮ 京都大学の墓碑銘
- ⑯ 天皇機関説
- ⑰ 陸軍士官学校事件
- ⑱ 二・二六事件



創作ノート (清張蔵)



挿画・風間完

「肅軍に関する意見書」 (清張蔵)

あだち 足立中学校校歌

清張が故郷に残した足跡のひとつに、「足立中学校の校歌」がある。学校の沿革によると、この校歌が制定されたのは昭和二十七年。清張は、前年に「西郷札」が「週刊朝日」の懸賞に入選し、デビューを果たしていた。とはいえ、作家としてはまだ無名に近い時期だった。

当時、松本家は、黒原営団（現黒住町）に住んでいた。足立中学校に長女が在学していた縁からだろうか、校歌の作詞をすることになった経緯の詳細は、今ではよくわからない。作詞を書いた清張直筆の原稿には、校長宛ての添書が続いている。

東の嶺 茜雲間を
さし昇る 晨の光

若き希望に胸ふくらみ
ちから 身体にみつ

わが学校に 床しく因む
うるはしき 足立の山なみ

吾らに訓ゆ 風雪の山容
こゝろ かく鍛えむ

若草もゆる 三萩野の野に
大地を踏みて 仰ぎて立てば

雲悠悠 ながれきて
永遠の 生命みなぎる



大へん遅くなりましたした申訳ありません
別紙の通りに一應まとまりましたが、悪いところは御修正願ひます

わざと破調にして、七七とか七五調とかにしませんでした、作曲によつては新味が出ると思ひます

小沢校長先生

松本清張

最終的な歌詞は若干の変更が加えられているが、内容はほとんどそのまま生かされ、現在でも「作詞・松本清張」の校歌が足立中学校で唱和されている。

歌詞にもあるように、「足立」はこの地域から望む「足立山」に因むのだが、清張にとつてもゆかりの深い、思い入れのある山である。「半生の記」でも、冬の空にオリオン座が（足立山の頂上から上ってくる）（印刷所の夜業をすませて家に帰るとき、足立山の上にこの星が貼りついている）と書いている。

少年時代は小倉市街地に住んでいた清張だが（友だちとよく足立山ろくへ遊びに行きました）（足立山にもよく登った。妙見宮の杉林を通り、高い所から小倉の市街を見渡した眺望は、抜群でした）*と語っている。

「黒地の絵」の舞台、城野キャンプもすぐ近くだった。脱走した黒人兵のうち数名は足立山に逃げ込んだ。事件の背景には朝鮮戦争がある。足立山の中腹に、この戦争で失われた多くの生命を悼んで建立された慰霊碑とメモリアルクロスは、いまでも海に向かってその輝きを放っている。

（専門学芸員 柳原暁子）

*「朝日新聞」北九州版 1983年10月27日（「福岡の自然100選」）



「天城越え」④

作品の舞台を訪ねて

「刑事捜査参考資料」の「天城山の土工殺し事件」の記述はこうなっている。「大塚ハナの自供によれば、天城峠付近で被害者と出会い、金を得る目的でハナの方から持ちかけて「売春行為をしたが、約束どおり被害者が金を払わないので、それを請求しながらトンネルを通り抜けたが、被害者がさらに金を出そうとしないのでかっとなり、かねてふところの中に所持していた匕首を出して、斬りつけ、杉林の中に転がり落としたところ、本人は絶命していた。そこで金はないかと思つて、滅茶滅茶に衣類を脱がせたところ、五十銭銀貨が二枚出てきたので、それを奪つて逃走した。」

「私」の回想では、売春行為の後、女は、男にさよならともなんとも言わないで、さっさとひとり先で歩いて行った。男は、女のあとを追うでもなくのろのろと一人て歩き出した。「私」は、男を「トンネルを出たところ」（新潮文庫版による。松本清張全集版では「トンネル下の山葵沢近く」）で殺した。男が道ばたにしゃがんだところを、ふところにもつていた切出しで、頭や顔などに斬りつけた。着ているものを滅茶滅茶に破りつつが、どう脱がせたか記憶にない。

事件発覚の発端となったのは、点描「天城



旧天城トンネル（天城山隧道）南口



躰子歩道周辺

（西本 衛）

越え」①で検証した「白橋の側」の異変の届出であった。橋の下の川の中に、投げ捨てられていた着衣は何者かが無理に脱がせたものと認められた。

新潮文庫版では、ハナの自供も、「私」の回想もどちらも、「トンネルを出たところ」で斬りつけ、男は杉林の中を転がり落ちた、となつている。しかるに、着衣は「トンネル北口」を一キロメートル下つたところにある白橋の下の川の中に投げ捨てられていたのである。南口の杉林の中で脱がされた着衣が、なぜ、トンネルの向こう側にある白橋の下の川にあったのか。これについては、次回（最終回）で検証する。

左は、「旧天城トンネル（天城山隧道）南口」の写真である。大塚ハナの供述によれば、トンネルを通り抜けたこの南口のところ、男は殺された。

■ イベント「清張こどもかるた大会」

■ 8月25日(土) ■ 記念館地階ホール

「小学生が郷土の偉人・清張さんに親しみを持つきっかけをつくりたい」と博物館実習中の大学生が中心となって「かるた大会」を実施しました。

市内の小学生23名が参加しました。この日のために用意したかるたは、全てオリジナルの手作りです。

「かるた大好き!」という子どもたちは真剣そのもの。後半はかるたの内容をふまえたクイズで、楽しみながら清張さんについて学びました。参加者からは「読書は大好きなので、清張さんも読んでみたい」との声も聞かれました。



クイズでおさらい

■ 松本清張没後20年記念事業 特別企画展「松本清張と映画」・ 常設展展示品リニューアル

オープニング式典

■ 平成24年8月1日(水) 10時

■ 記念館1階 常設展示室入口

松本清張と親交の深かった小野昭治氏と、市民文化スポーツ局長・片山憲一、館長・藤井康栄によるテープカットが行われました。



友の会 活動報告

● 平成24年度年次総会・懇親会

8月4日(土) 参加者35名

北九州市立男女共同参画センター・ムーブ 5階

長谷川権氏の記念講演の後、平成24年度友の会年次総会が開催されました。前年度の事業報告・決算、役員改選、新年度の事業計画・予算等の審議が行われ、拍手をもって承認されました。総会終了後の懇親会は、会場を記念館地階ホールに移して盛大に行われました。小林慎也会長や藤井康栄館長の挨拶をはじめ、遠方からの参加者のスピーチなども行われ、和やかな懇親会となりました。

● 清張サロン | 記念館 地階会議室

平成24年度の第1回清張サロンは、特別企画展「松本清張と映画」をテーマに、又、第2回清張サロンは、海外における清張作品の受容に関連して「松本清張と翻訳」をテーマに、それぞれ記念館の担当職員からお話していただきました。清張サロンならではの詳細な資料を準備していただき、大変有意義で充実した清張サロンとなりました。

第1回 9月18日(火) 14:00~16:00 参加者25名

- テーマ 特別企画展「松本清張と映画」について
- 講師 中川 里志氏(記念館学芸担当主任)

第2回 10月19日(金) 14:00~16:00 参加者20名

- テーマ 「松本清張と翻訳」
- 講師 柳原 暁子氏(記念館専門学芸員)

● 文学散歩「点と線」「時間の習俗」の舞台を訪ねて

11月1日(木) 参加者45名

西鉄香椎駅→香椎宮→大宰府政庁跡→観音寺・宝蔵→九州国立博物館

今回は「香椎・大宰府」を訪ねました。西鉄香椎駅では平成24年3月に完成した「点と線」の壁画をはじめ、香椎浜や駅前商店街などの昭和30年当時の貴重な写真などを見学しました。また、香椎宮や大宰府政庁跡などでは、宮司や史跡解説員の方から詳しい説明を聞くことができました。そして、九州国立博物館では、今話題のフェルメール「真珠の首飾りの少女」などの世界の名画を鑑賞し、芸術・文化の秋にふさわしい充実した文学散歩となりました。参加者からは「昼食も大変良かった」「次回の文学散歩も楽しみです」との声がたくさん頂きました。



● 友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集 ●

松本清張記念館友の会は8月1日~翌年7月31日を1年度として、文学散歩や清張サロン、講演会、生誕祭、「友の会だより」の発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしております。

友の会入会のお申し込みは、松本清張記念館友の会事務局まで
TEL. 093-582-2761

第14回

松本清張研究奨励事業
奨励金贈呈式

平成24年8月4日、第14回松本清張研究奨励事業奨励金の贈呈式が行われました。下記の入選者に、片山憲一北九州市市民文化スポーツ局長から奨励金が贈呈されました。

研究奨励事業入選者



企画名 松本清張と地方紙
—「黄色い風土」を中心に

入選者 山本 幸正
(早稲田大学教育学術院非常勤講師)

松本清張没後20年記念事業 2012

松本清張没後20年の平成24年1月～12月に次のような催しが行われました。

- 特別企画展「いつもカメラを携えて」
1月20日(金)～5月6日(日) 地階企画展示室
- 国際共同研究公開シンポジウム「東アジアにおける松本清張作品の受容」
2月11日(土・祝)・12日(日) 地階ホール
- 清張サロン特別講演会「清張と地方史」
3月22日(木) 北九州市立生涯学習総合センター
- 企画展関連講演会「ニコンF3松本清張スペシャル作成の過程」
3月24日(土) 地階ホール
- 平成24年度 中学生・高校生読書感想文コンクール
4月1日(日)～10月31日(水)
- 第15回 松本清張研究奨励事業募集
4月1日(日)～25年3月31日(日)
- 劇団前進座朗読劇「波の塔」
4月21日(土) 地階ホール
- 東京・八重洲ブックセンター『清張フェア』
6月1日(金)～8月31日(金)
- 松本清張研究会 第26回研究発表会
6月2日(土) 早稲田大学小野記念講堂
- 清張サロン特別講演会「張込み」
6月15日(金) 地階企画展示室
- 劇団前進座朗読劇「波の塔」
7月15日(日) 東京・八重洲ブックセンター本店8階ギャラリー
- 特別企画展「松本清張と映画」
8月1日(水)～10月31日(水) 地階企画展示室
- 常設展展示品リニューアル
8月1日(水) 1階常設展示室
- 開館14周年記念講演会 長谷川耀氏「『砂の器』と俳句」
8月4日(土) 北九州市立男女共同参画センター2階ホール
- 特別企画展関連映画祭 清張原作映画の上映
8月4日(土)～24日(金) 小倉昭和館
- 清張サロン特別講演会「松本清張と三島由紀夫」
11月30日(金) 地階企画展示室
- 松本清張研究会 第27回研究発表会
12月1日(土) 静岡大学
- 生誕祭
12月12日(水) 地階企画展示室

- **編集後記** ● 年明けの1月19日(土)から松本清張没後20年記念事業をしめくぐる特別企画展「昭和史発掘への招待」を開催します。若い頃読んだ13巻本をあちこちから集めて読み直しています。未読の方は活字の大きな新装の9巻本を手にとられてみてください。昭和に意外な発見をするかもしれません。平成25年は、北九州市制50周年、また、記念館開館15周年です。これを記念した事業も企画しています。来年も記念館にご期待ください。(西本 衛)



イラスト：山藤 章二

編集・発行
松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093 (582) 2761
FAX 093 (562) 2303
<http://www.kid.ne.jp/seicho>
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)
小学生/200円(160円) ()は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
小倉駅からはバスをご利用いただく便利です(小倉城・松本清張記念館前下車)
車: 北九州市都市高速、大手町ランプより5分

第15回
松本清張研究奨励事業募集

募集要項

- 対象** ①松本清張の作品や人物を研究する活動
②松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)
※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限り。個人または団体も可。
- 内容** 入選者(団体)に200万円を上限とする研究奨励金を支給します。
- 応募方法** 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的にわかる企画書、予算書、参考資料(様式は自由、ただし日本語)を、平成25年3月31日までに応募してください。

※詳しくは、ホームページをご覧ください。
記念館までお問い合わせください。

